

# 『一心二河白道』

本書は江戸の書肆西村屋から出版された六段物の土佐浄瑠璃の正本である。浄瑠璃は中世以来愛好された語り物のひとつで、その名称は浄瑠璃姫と牛若丸との恋物語を内容とする「浄瑠璃御前物語」に由来している。天正(1573-1591)後期に伝来したという三味線を伴奏に節付けされて浄瑠璃節となった。文禄・慶長(1592-1614)の頃に人形操りと結びついてわが国独特の人形芝居として発展し現在に至っている。近松門左衛門・竹本義太夫登場以前の浄瑠璃を総称して古浄瑠璃というが、土佐浄瑠璃はその古浄瑠璃の一流で、上方浄瑠璃に対する江戸浄瑠璃の代表的な太夫である土佐少掾橘正勝によって語られ始めた曲節である。

本書の内容は、京都清水寺の僧侶清玄が美貌の桜姫に恋い焦がれ、死後も亡霊となって桜姫に付きまとうという恋の妄執をテーマとするいわゆる清玄・桜姫ものに、丹波国の子安地蔵の縁起譚をないまぜにして作られている。書名にいう「二河白道」は、冥界に流れる水の川と火の川の間にあるという一筋の白い道のことで、男子を出産して死んだ後も清玄に追いかけられた桜姫がここに辿り着き、観音の導きによって極楽世界に赴き、やがて女性の出産を守る子安地蔵となって現れるということに拠っている。

清玄・桜姫ものの古浄瑠璃正本としては、寛文13年(1673)刊の山本九兵衛版の伊藤出羽掾正本が最も早い時期のものとしてされており、本書はそれに続くものである。鳥居フミ子氏は『近世芸能の研究 土佐浄瑠璃の世界』において、本書を元禄初年(1688)頃の出版と推測されている。土佐浄瑠璃正本『一心二河白道』の伝本は成蹊大学図書館蔵の本書のみであり、『土佐浄瑠璃正本集 第三』に収める翻刻の底本にもなっている。

## [参考文献]

成蹊大学図書館所蔵稀書解説目録：成蹊大学図書館，2006.9 026/Se17  
2013300481

# 一心二河白道①

丹波の国老の坂の長者佐伯の郡司秋高には、桜姫という美しい姫君がいた。婿を迎えることとなり、祝言の前に清水参詣をしたところ、若僧式部卿清玄が姫を見初める。国元で祝言が執り行われるが、閨近くに心という字が現れ、美僧の首に変じたりするので、婿は恐れて逃げかえる。その後迎えた婿も同様の怪異に逃げ出してしまふ。しかし、婿養子を募る高札に応じて津の国の多田から来た田辺吉長が心の字から現れた餓鬼の首を討つ。

## 一度目の怪異

(婿が)一間の回廊過行 閨近く成所に 何とやらん物凄じく 身の毛もよだち不思議さよと 天井をきつと見れば 何かは知らず 怪しき猛火下がり 車輪のごとく回り 忽ちばつと消え 跡を見れば 心という文字現れたり 是 清水の清玄が一心の通うしるしなり

この文字 さも美しき法師の首と変じて 姫君の閨近き御簾の前に下がりて かの男を見付けて につこと笑つて それよりも御簾の内へぞ入にける

## 田辺吉長が討つ場面

(吉長が)姫君の閨近き回廊にさしかる案のごとく物凄まじき風吹き身の毛もよだつばかりなるに 例の天井より怪しき物こそ下がりけれ 澄まして事をよく見れば 心といふ字見へたりけり

みきのぜう(吉長)これを見て「さてこそ某了簡は当たりたるぞ とくと見澄まし ためしを絶つてとらせん」と 躊躇もなく立寄れば 心といふ文字の内より 餓鬼の首現れ 五体は蛇身のごとく也 さも凄まじき風情にて 姫の閨に入らんとするを 吉長 得たりと太刀引ん抜いて はつたと切る首打落とせば 火焰となつて失せけるは 恐ろしかりける次第也

## [参考文献]

古浄瑠璃；説経集 / 信多純一、坂口弘之校注：岩波書店，1999.12

918/31/90 0099111495 p. 494-506より引用、一部要約

土佐浄瑠璃正本集 第3 / 鳥居フミ子編：角川書店，1977.3 912.4/27/3

0077300228